

宮崎発夢未来～ときめきと学びを世界中に

日本講演新聞

2025年(令和7年)

11/24日

3096号

発行 (株)宮崎中央新聞社

「凡事徹底」の一言で
人生が変わった

多賀城掃除に学ぶ会 代表世話人

小畑 貞雄



【おばた さだお】1955年生まれ、宮城県多賀城市在住。陸上自衛隊(航空隊)や木材会社勤務などを経て、2009年に同会を設立。学校や公共施設のトイレ掃除を通じ、「心を磨く掃除」を実践してきた。東日本大震災では被災しながらも避難所のトイレ掃除を続け、多くの人に感動を与えた。凡事徹底を信条に、地域に奉仕する生き方を貫いている。

私

は、宮城県仙台市の貧しい農家の長男として生まれました。

高校卒業後は、親戚のすすめで自衛隊に入隊し、モールス信号や暗号通信の技術を学びました。

6年で除隊し、地元の木材会社に就職しました。15年ほど勤めた頃、会社関係者が汚職事件で逮捕され、私も会社を辞めざるを得なくなり、その後は蒲鉾会社で配送の仕事をして生計を立てるようになりました。

その頃から、私は自分の将来に不安を覚えるようになりました。「自分は何をしても人より劣る。体も小さいし、勉強もできない。そして吃音がひどい」と思い悩み、心の支えを求めて本を読み漁りました。

それでも夜になると不安が押し寄せ、胸が締めつけられるような思いに駆られていました。

私は、イヤホンでラジオを聴きながら寝るのが習慣でした。そんなある夜、NHKの「ラジオ深夜便」で、自動車用品販売大手「イエローハット」の創業者・鍵山秀三郎さんの特集を聴きました。

「凡事を徹底する」をテーマに二夜にわたって話をされました。初日はトイレ掃除とゴミ拾い

の話、2日目は経営者として経営と生き方について語られました。でもその時は、内容が心に響かないまま終わりました。

3か月後、再放送がありました。私はなぜか気になつて、2日間ともラジオで録音しました。改めて聴いてみると、以前と同じ内容なのに今度は胸に強く突き刺さりました。

特に心を動かされたのが、2日目の最後の10分くらいで話された「宿泊マナー」の話でした。

鍵山さんは、「基本的なことをやり続けると、やがて周囲が変わる。自分もその思いでトイレ掃除を続けている」と語ります。

その言葉に、「私もこんな生き方をしたい。こんな人間になりたい」と目が覚めるような衝撃を受けました。

今思い返すと、それまで私の中には、木材会社でのつらい経験や自衛隊を早期に除隊したことへの後悔などから、「今までのように馬鹿正直に生きるのではなく、これからは、ずるく生きてもいいのではないか。要領よく生きてもいいのではないか」という邪な気持ちがありました。

しかし、凡事徹底の真摯な生き方を知ったことで、そうした私の思いが払拭され、「自分もこれを実践しながら生きていこう」と導

かれたのです。

●トイレ掃除との出会い

近所にイエローハットの店舗があったので、さっそく訪ねました。

店内外はきれいに整理されていて、トイレも清潔でした。従業員の対応も丁寧で、「ラジオで聴いた通りの素敵な店だ」と感動しました。

私は手ごろな商品を手に取り、レジへ向かいました。

対応してくれた女性に代金を支払い、店を出ようとしたその時、なぜか振り返って、「先日のラジオを聴いて、鍵山社長のファンになりました」と声をかけてしまいました。

今思えば、少し照れくさい行動だったと思っています。

10日ほど経った時、わが家に小包が届きました。「何だろう?」と思って開けてみると、『日々これ掃除』(致知出版社)など鍵山さんのサイン入りの本が4冊入っていました。

ページをめくって読むと、一瞬で将来の不安がなくなるすごい言葉が出てきました。

「汝の行動は汝の予言者なり」という言葉です。そしてその言葉の横に、「あなたがとっている行動そのものが、あなたの将来を予言しています」とい

う説明書きが添えてありました。

この言葉を読んで私は、「今怠けていたら、将来怠けた人生を送ることになる。自分の将来は自分が一番知っているということだ」と思いました。その言葉に引き込まれながら私は本を読みました。

読み終えると、「こんなに素晴らしい本があったんだ」と私の心は舞い上がりました。

それまで、私は時間さえあれば本を読んでいた。年間1000冊くらいのペースで、累計1500冊くらいの本を読んでいた。でもその本を読み終えた時、「この1冊があれば生きていける」と確信できました。

そして、書庫にあった1500冊を整理し、10冊だけを手元に残し、残りはすべてリサイクルショップに持ってきました。

「このままではいけない」という焦りを感じた私は、すぐ本屋に行きました。

鍵山さんの著書に、よく森信三先生が出てきます。森先生の『人生二度なし』(致知出版社)の本がとても気に入って、購入しました。

最初は内容が難しくよく理解できませんでしたが、最後のほうに記されていた「人間の一生」という文章に心を奪われました。それはこんな文章です。

職業に上下もなければ貴賤きせんもない。

日本講演新聞からの

「問いかけ」

記事に関連し、皆さんの考え方や経験を問う質問を社説下の欄で提示します。職場の研修や家族・友人とのコミュニケーションの一環として、回答を共有してみてください♪

社説下の質問を
ご確認ください!



「問いかけ」共有の手順
法人割(※)について



※10部以上ご購入の法人の方への割引を始めました。
(同一住所への郵送が対象となります)

世のため人のために役立つことであれば、何をやるうと自由である。

しかし、どうせやるなら覚悟をきめて十年やる。すると二十からでも三十までには一仕事できるものである。

さらに十年本気でやる。すると四十までに頭をあげるものだが、それでいい気にならずに、さらに十年頑張る。

六十ともなれば、もう相当に実を結ぶだろう。

それから十年頑張る。七十から八十、このコースが一生で一番面白い。

「世のため人のために役立つことであれば、何をやるうと自由である」という言葉が胸に響きました。

「自分はこれから何をしてもいいんだ」と勇氣と自信が湧き、この「コース」を味わいたいと思いました。

そして始めようと思ったのが、鍵山さんの本に書かれていたトイレ掃除です。私のきれいな性格がそうさせたのです。

森先生の本は、擦り切れるくらい何度も読みました。

(2面へ続く)

1面から続く



多賀城掃除に学ぶ会 代表世話人

小畑 貞雄

Obata Sadao

避難所でも始めたトイレ掃除



●「凡事徹底」を心の支えに

公園のトイレ掃除を始めて5、6年くらい経ったある日のことです。

県職員の方が、トイレ掃除をしている私のところに真っ青になつてやつてきました。

その方が初めて「小畑さんと、私の名前を呼んでくれました」「小畑さん、障害者のトイレが大変なことになつている」と言うので、私はその方と一緒にそのトイレを見に行きました。

見ると、言葉では言い表せないほどのものすごい量の汚物が放置されたままになっていました。

職員は、その写真だけを撮つてすぐに去っていききました。その後、一人で7時間ほどかけてようやく元通りにできました。

ですがその後数日間、私はショックでご飯が食べられなくなりました。

振り返ると、つらいことの多い公園のトイレ掃除でした。でも「凡事徹底」の言葉を何度も思い返し、それを心の支えにしながら、55才まで一人で公園のトイレ掃除を続けました。

今では、私のトイレ掃除歴は30年、トイレ掃除の総数は5000回を数えるほどになりました。

●避難所のトイレ掃除

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。

私の住む多賀城市の自宅も津波の被害を受け、それまで使っていたトイレ掃除の道具は車ごと流されました。

家族の無事が確認できてほつとしていたところ、イエローハットの鍵山さんから「何か必要なものはありますか?」という手紙が届きました。

「こんな非常時でも、私にもできることがあるはずだ」と思い、感謝しながら掃除道具一式を送っていただくよう鍵山さんをお願いしました。

4月16日から私は、避難所に指定された多賀城市総合体育館に通い、トイレ掃除をさせていただくことになりました。

「トイレが汚い状態では、避難所で生活している方々の気持ちが落ち着かないのでは?」と思い、私にできることを始めたのです。

わ

が家の前には、周囲5キロほどの広大な県立の緑地公園があります。

その公園にはトイレが7つありましたので、県の管理事務所に行つて「公園のトイレ掃除をさせてください」とお願いしました。私が40歳の時です。

すると管理事務所の所長は、「いくら欲しいんだ?」ということを、ちよつと汚い言葉で言いました。私がみずばらしい格好をしていたせいか、仕事を求めてきたと思われたようです。

私が「お金は要りません。ただ掃除をさせてください」と答えると、「道具はどうするんだ」と言われました。「道具も自分で準備します」と答えました。

こうして私の人生初のトイレ掃除が始まりました。週に3回やりました。通りすがりの人たちから、「あんな、これでいくもらえるんだ」「こんなところを掃除してもザルで水をすくうよ

うなもんだぞ」と言われました。そんな言葉に私は心の中で、「ザルでも一滴の水は、すくえる」などと思ひながらトイレ掃除を続けました。

やがて、「ボランティアで公園のトイレを掃除している人がいる」と新聞で紹介されました。

すると、私の親の家にいたずらに電話をかけてくる人が出てきました。親戚からは「もうやめて」と言われました。それでも掃除を続けてきました。

「公園の掃除がなぜいけないのだから」と、訳が分かりませんでした。

でも、「これも自分が試されているのだ」と思つてトイレ掃除を続けました。

その間、管理事務所の所長は何人も替わりました。でもどなたも、一度も掃除を見に来たり、あいさつをしに来られたりはしませんでした。

平

日は仕事を終えてからの数時間、そして週末は半日程度、自宅の片付けをしながら避難所となった体育館のトイレ掃除を続けました。

体育館には多い時で500人超が避難し、各地からボランティアの方がたくさん来られました。

でも残念ながら私のように「トイレ掃除をします」という人は、半年間誰も来ませんでした。

避難所のトイレは、誰も掃除をする人がいないのですぐに汚れてしまいます。だからトイレ掃除を買って出ると、皆さんにとっても喜んでいただけました。

他のトイレが空いているのに、私のトイレ掃除が終わるのを並んで待つ人たちもいました。やはりみんなきれいなところで用を足したいんだろうなと思いました。

しかしながら私のトイレ掃除は長いので、「明日から来るな」と言われたり、道具を蹴とばされたりすることもありました。

● 継続することの難しさ

避難所でトイレ掃除をする私の姿を見て市役所の方が感動されて言いました。

「市民がここまでやってくれてい

膝をつくことと左手を添えること

るのだから、私たちも協力したい。一緒にトイレ掃除をさせてもらいたい」

「どうしてもと言われたので、第2土曜日は多賀城駅前のゴミ拾い、第4土曜日は公共のトイレ7か所ある中の1か所ずつをやりたい」ということでスタートしました。

最初の頃は毎月、職員の方が何人もいらっしやっていたましたが、2年半ほどで全滅し、また一人になりました。

始めることは簡単ですが、継続することの難しさをいつも感じています。

皆さんが来られなくなっても、私は毎朝4時にゴミ拾いをし、5時からトイレ掃除をして、それから仕事に行きました。

雨が降ろうと熱があろうと、例外なしは私の掟です。

避難所生活が続く中、感染症が問題になった避難所もあったようですが、多賀城市の体育館では起こりませんでした。

その後、避難所が閉鎖されるまで、私は一日も欠かさずトイレ掃除を続けました。

● 心を下げる、心を磨く

30年間トイレ掃除をしてきて思うことがあります。

それは「膝をつくこと」と「左手を添えて行う」ことの大切さです。それをする、謙虚と丁寧と優しいス

イツチが自動に入ります。私は何をする時でも必ず左手を添えます。トイレ掃除でも電気のスイッチの入切りやドアの開け閉めでも、必ず左手を添えて行います。

私は学校のトイレ掃除をさせてもらっているのですが、正面玄関から入ると下駄箱の一番上にあるのは、だいたい校長先生の靴です。

だからある小学校で、盟友の市岡校長先生に「校長先生の靴は、下駄箱の一番下ですよ」と言いまして、即、上から一番下に置き替えてくれました。そして、下駄箱の一番下に入っていたA.L.T担当の先生の靴を、一番上に置きました。

校長先生にはいつも謙虚で優し

い先生でいてほしいと思うのでうさせていただくのです。

靴の置き場所が下駄箱の一番下だと、靴を脱ぐたびに膝をつき、自然と身をかがめて靴を置きます。

その所作の中で、いつのまにか謙虚な気持ちが生まれてくるのです。そうすると学校職員や児童への態度が優しくなります。そんな謙虚な気持ちで行う学校運営は、きつとうまくいくだろうと私は思うのです。

置き場所が下駄箱の一番上だと、見下ろすように靴を置くことになり、「自分は偉い」と思う心が知らず知らずのうちに芽生えてしまふそうです。

私はこれまでのトイレ掃除の経験を通して、「心を下げる、心を磨く」ということを学んできました。

だから小学校にトイレ掃除に行くと、校長先生の靴は下駄箱の一番下に置きましょう」とお伝えします。

でもなかなか言うことを聞いてくれないことが多いです(笑)。

(NPO法人日本を美しくする会関西ブロック大会実行委員会が主催した講演会より／取材・大槻千佳子 関西特派員、編集・西隆宏)



トイレ掃除をする小畑さん
(提供:小畑さん)